

# 「海」を多く用いられるのはなぜ?

● せいいてん 質問箱

● 質問 ●  
親鸞聖人はなぜ「海」の語を多く用いられたのでしょうか?

## □ 七祖の用例

如来のはたらきや苦しみ悩む衆生の境界を表すとき、親鸞聖人は「海」という言葉を用いられていることがあります。しかしそれは聖人に限ったことではありません。例えば七祖の中で龍樹菩薩は『十住毘婆沙論』『易行品』に「難度海」という言葉を用いておられますし、天親菩薩の『浄土論』には「功德大宝海」という言葉が出てまいります。また、曇鸞大師の『往生論註』には「諸仏正遍知海」という言葉をはじめ、

「生死海」「清淨智海」「大会衆海」などの表現が見られますし、たとえば「諸仏正遍知海」については、  
この知、深広にして測量すべからず。ゆゑに海に譬ふべからず。  
(七祖八三頁)

と「海」という語を用いる理由も示しておられます。同様に「清淨智海」という語についても、  
「海」というのは、すべてを知り尽しておいでのなる仏の智慧が、深く広く果てしなく、声聞や縁覚の自力の善の死骸を宿さないことを、海のようにであるとなとえるのである(現代語版『教行信証』、一三〇頁)

と「海」の語で喩える理由を述べておられます。  
特に後者は『教行信証』の中に引用され、また御自釈(一

ある世界と受け取ることができるといふこと。

三つには、「海」はさまざまなものを受け入れるということ。例えば川の水は海へと流れていきますし、私たちも海へと入っていくことがあります。「願海に流入せしむ」「願海に入る」などの言葉や、「生死海に入りて」「生死海に漂没して」などの言葉は、海が何ものも受け入れず、そこへ入り込むことが出来なければ成り立たない表現です。

四つには、その海の向こう側に、まだ見ぬ世界があるということです。言葉を換えれば、「海」はそれを超え渡るべきものであつて、しかもその広さと深さのゆえに泳いで渡ることができません。また、その海が穏やかなものではなく、荒れ狂う波が逆巻くようであれば、小舟で渡りきること不可可能です。大きくて丈夫な船だけがその海を渡ることが出来るのです。龍樹菩薩

が「易行品」に、  
かの八道の船に乗じて、よく難度海を度したまふ  
(七祖一九頁)

と述べられているのを受けて、親鸞聖人も、  
難思の弘誓は難度海を度する大船  
(二二二頁)

と示されており、あるいは、  
一切智船に乗せしめて、もろもろの群生海に浮ぶ  
(二〇一頁)

## □ 親鸞聖人の用例

思いつくままに「海」が持つはたらきや特性を考えてみましたが、親鸞聖人の用例の特徴は、その用例の多さとバリエーションの豊かさにあります。聖人の用例には、もちろん七祖が用いられている表現を元にされています。

乗海積)にも同様の内容が示されていますから、聖人も海のはたらきの一つをこのような意味で捉えられていたものと思われま。

また、道綽禪師の『安樂集』や善導大師の著述、あるいは源信和尚の『往生要集』にも、「生死海」や「功德海」「苦海」「莊嚴供養海」「清淨大海衆」といった言葉が見られます。むしろ源空聖人の『選択集』に「海」の語の譬えがほとんど見られるほどです。

## □ 「海」のはたらきと特性

このように親鸞聖人だけでなく、七祖の上でも「海」という言葉を用いた表現が数多くあります。そしてそれらの用例は、意味の上から考えてみると、「願海」や「功德大宝海」などのように如来のはたらきを示される場合もあれば、「苦海」や「群生海」などのように苦しみ悩む

衆生の境界をあらわされているものもあります。このようにどちらにも用いられるのは「海」がどのような特性を持っているからでしょうか。

一つには、その広大さがあげられるでしょう。「本願海」や「功德大宝海」といった言葉は、その徳の広さを示しているでしょうし、また「群生海」や「愚痴海」などの言葉も、迷いの世界にある衆生が限りなく存在することや、またその迷いの深さを物語っているように思います。

二つには、それが静止した世界ではなく、動きがあり、はたらきがある、ということ。動きに見た「清淨智海」の説明では、衆生の煩惱にまみれたありようが如来大悲の智慧によって功徳に転ぜられるというはたらきを意味しているのです。一方、「無明海」や「生死海」という言葉も、迷いの世界をめぐり続けているという私たちのありようを示すものとして、動きの

る場合もあるのですが、「本願海」や「群生海」など聖人特有の言葉もあります。そして、例えば善導大師が『観経疏』に一度だけ用いられている「一乗海」という言葉を、「本願一乗海」「弘願一乗海」「一乘大智願海」等と広く応用して使われていたり、あるいは聖人特有の用例である「信心海」という言葉についても同様に、「信心海」「大信心海」「大信海」など同類のものがある。その用例はバリエーションに富んでいます。このように「海」について、その「海」を用いた言葉の多さとバリエーションの豊かさこそ、親鸞聖人の用例の特徴といえます。多くのの方々のご指摘になるとおり、私もまた、それは聖人御自身の体験によるのではないかと思います。

## □ 北陸の海

九十年に及ぶ生涯のなかで海が間近にあったのは、聖人が流

罪にあわれた北陸の地です。眼の前に広がる日本海は、時に荒々しく波を海岸に打ちつけ、時に穏やかに沈みゆく夕陽を映したことでしよう。そうした実際の体験が豊かなバリエーションを持つ表現を生んだのではないのでしょうか。

## □ 光明の広海

最後に私が好きな海の譬えを一つあげておきます。  
しかれば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵ふなり、知るべし  
と  
(二八九頁)

御信心をいただきお念仏申す人生は、さとりの世界へ進みゆく力強い道行きであると、美しく表現されています。  
(本願寺派司教 安藤光慈)